

### ■日米ともに利上げ観測高まる

中東情勢の混迷に加え、インフレ懸念を背景とした利上げへの警戒感から、世界の株式市場は不安定な動きとなっています。10日発表の5月の米CPI(消費者物価指数)はおおむね市場予想通りの内容となったものの、FRB(米連邦準備制度理事会)の利上げ観測を打ち消すほどではなく、市場が織り込む年内利上げ確率は7割程度と依然高い水準にあります(図表①)。

もっとも、現時点で賃金上昇圧力がそれほど高まっていない点は明るい材料と言えそうです。米利上げ観測が高まるきっかけとなった5月の米雇用統計では、雇用者の増加幅に注目が集まりましたが、平均時給の伸びは前月から鈍化するなど、賃金上昇によるインフレ懸念は落ち着いていると見られます。

そのため、FRBは利上げを急がず、当面現行の政策金利を維持する可能性が高いと考えられます。まずは16~17日に開催されるFOMC(米連邦公開市場委員会)で、ウォーシュ新FRB議長の政策スタンスを確認したいところです。

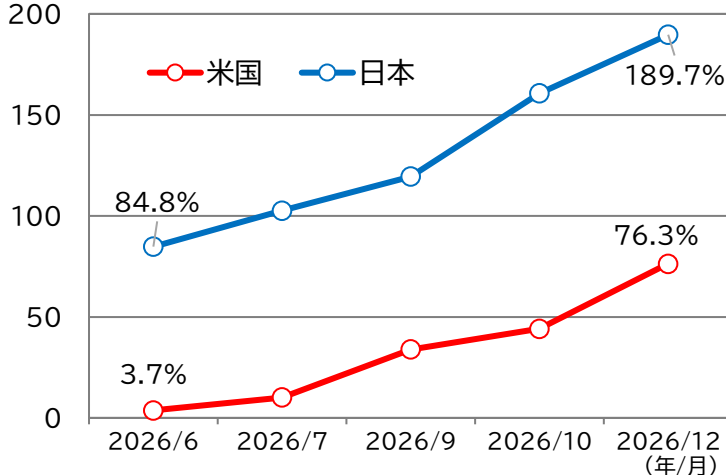
他方、日本においても、利上げ観測が高まっています。日銀は15~16日に金融政策決定会合を開催しますが、同会合では0.25%の利上げが確実視されており、市場もほぼ織り込み済みとなっています(図表①)。また、国債買い入れの減額計画についても議題に上る見通しです。日銀はこれまで、四半期毎に国債の買い入れ額を減らしてきましたが、金利急騰リスクに配慮し市場の安定を図るべく、2027年4月以降は減額を停止すると見られます(図表②)。

いずれも事前の観測報道がなされていることから、決定後の市場の反応は限定的なものになるものと思われます。

### ■企業業績の拡大が日本株の支えに

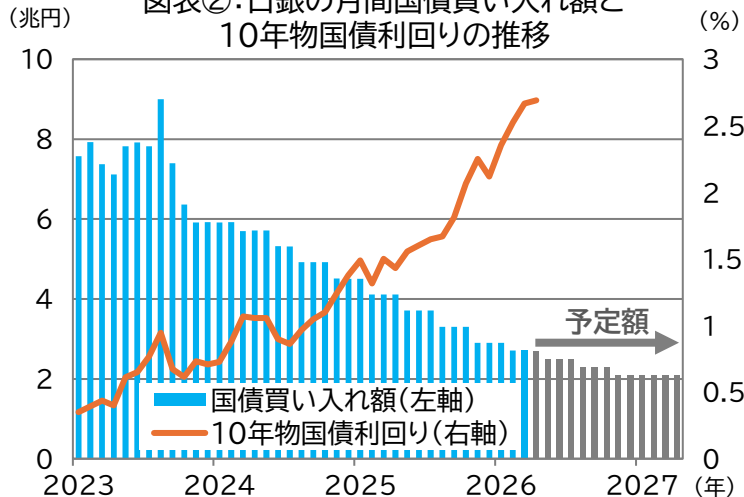
中東情勢を巡る不透明感やインフレ懸念、利上げへの警戒感の高まり等には引続き注意が必要ですが、企業業績が拡大基調を維持している点は、相場の支援材料になると考えられます(図表③)。短期的には、これまでの急ピッチな上昇に対する反動で売りに押される可能性も想定されますが、日本株の中長期的な上昇基調に変化は無いと考えられます。

図表①:日米中銀会合における利上げ確率の推移



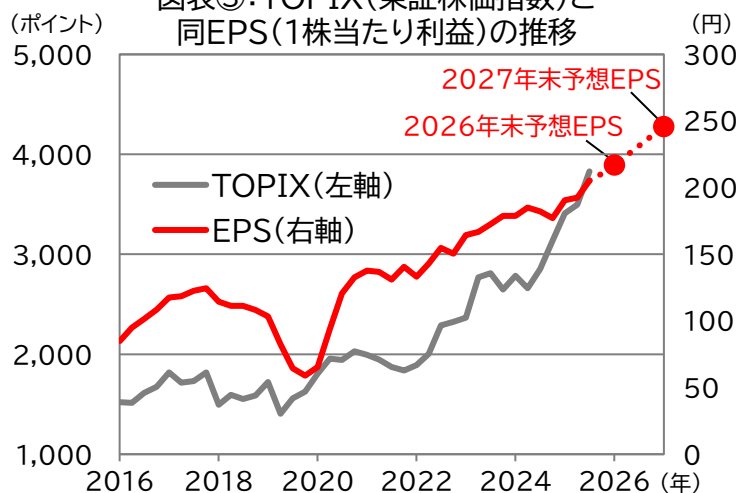
※ 2026年6月11日時点の年内の各中銀会合における利上げ確率  
 ※ 米国:FF金利先物市場、日本:OIS市場から算出  
 (出所)Bloombergよりいちよしアセットマネジメント作成

図表②:日銀の月間国債買い入れ額と10年物国債利回りの推移



※ 買い入れ額は2023年3月~2027年6月、2026年6月以降は予定額  
 ※ 10年物国債利回りは2023年3月末~2026年6月11日  
 (出所)日銀資料およびBloombergよりいちよしアセットマネジメント作成

図表③:TOPIX(東証株価指数)と同EPS(1株当たり利益)の推移



※ 期間は2016年12月末~2026年6月11日、予想EPSはBloomberg予想値(2026年6月11日時点)です。  
 (出所)Bloombergよりいちよしアセットマネジメント作成

◆当資料は投資判断のご参考となる情報提供を目的としていちよしアセットマネジメント株式会社が作成したものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資信託のお申し込みにあたっては、販売会社より投資信託説明書(交付目論見書)をお渡ししますので、必ず内容をご確認のうえ、お客様ご自身でご判断下さい。  
 ◆当資料は信頼できると考えられる情報をもとに作成していますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。運用実績などの記載は過去の実績であり、将来の成果を示唆、保証するものではありません。記載内容は資料作成時点のものであり、予告なく変更されることがあります。